

幻想の迷い人

海神アクアマリン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

噂を追って森の中を歩いていた主人公が間違っつて幻想入りしてしまい、沢山の人の力を借りて時々戦いながら、大切な場所に帰ろうとするお話です。

目次

幻想入り	1
霧の湖で弾幕	6

幻想入り

私は暗い森の中を歩いていった。その暗い森を正しい道に沿って歩いて行くと異世界に行けると言う噂を調べるためにここに来ました。でも、この森は昼も夜も関係なく暗いし、広いからどこまで進んだのか分からなくなります。そんな中を二時間も歩いていいるから、だんだんと疲れが溜まってどうでもよくなってきました。

「もう、やめて帰ろうかな」

そう言つて後ろを振り返ると、目の前に幻想的な美しい風景が広がっていました。私はその美しさに見惚れてしまい、しばらくそこから動けませんでした。そんな時、空から女の人の声が聞こえて来ました。

「あら、間違つて入つて来ちゃつたのかしら」

私は驚いて空を見上げました。そこには特徴的な日傘をさした長い金髪の女性が浮いていました。その女性は私の方を見て薄気味悪い笑みを浮かべていました。

「あの、ここはどこで、あなたは誰なんですか」

私がそう問いかけると、彼女は地上に降りて来て私の目を見て答えました。

「ここは幻想郷よ。そして、私は八雲紫というのよ」

彼女は私から目を逸らさずに私に言いました。

「私が答えたのだから、あなたにも名前と住んでいる場所を答えてもらおうよ」

私は当然だと思いながら、彼女が人でないことに確信していた。幻想郷なんて場所は知らないし、何より空中に浮いていた時点で人でないことは明確だ。それでも、私は彼女からの質問に答えることにした。

「私は夕闇夜宵(ゆうやみやよい)です。ここが私の住む世界と異なるのなら、私は外の世界から来ました。」

「あら、やっぱり外の世界から入つて来てしまったのね。でも、どうやって入つて来たのかしら。普通に入ることとは出来ないはずな

のに」

彼女：いや、紫は私に聞こえるように言った。それから、考えるように小声でぶつぶつと言った。

「あの、どういうことですか。普通に入ることには出来ないって、私は噂を調べるために森を歩いていたらここに来たんですけど」

私がそう言うと、紫は不思議そうな顔で私に向かって言いました。

「今、噂を調べてたって言ったわよね。その話、詳しく聞きたいわ。そこで盗み聞きしてるあなたも聞きたいんでしょ、出て来なさい」

私が紫の向く方向を見ると、鳥居とその先に神社が建っていた。鳥居には博麗神社と書いてあるのが分かる。その鳥居の陰から巫女が現れた。そして紫に言った。

「さすが紫ね。私が最初から居たのにも気づいていたんでしょ」

「ええ、ちゃんと気づいていたわよ。あなたって分かりやすいんだもの」

紫は巫女と普通に話していた。私には分からないけど、どうやら紫と巫女は知り合いのようだ。

「あの、その巫女さん、あなたの名前を教えてくださいませんか」
私がそう言うと巫女は笑顔で答えてくれた。

「そういえば自己紹介してなかったわね。私は博麗霊夢、この博麗神社のちゃんとした巫女よ」

ちゃんとした、という表現に私は少し違和感を感じていた。そんなことを考えている時に紫は言った。

「さて、自己紹介も済んだことぬだしそろそろ話を聞かせてちょうだい」

「私の調べていた噂の事ですよね」

私がそういうと霊夢は言った。

「そうよ、早く教えなさい」

紫と違って霊夢は少し危険だと私の勘が言っていた。それで

も私はしっかりと言うことにした。

「えっと、私の調べていた噂というのは、とある森の中を正しい道に沿って歩いて行くと異世界に行けるというもので、私はその道の途中でやめて帰ろうと振り返ったらここに来てしまったんです」

紫は私の話を聞いて何かに気づいたようだった。

「まさか、そんなことがあるはず無いわ。幻想郷に繋がるゲートは確かに存在する。でも、森がゲートの役割を果たすことは無いはずよ」

「だとすると、この子が能力を持っていて、それが原因で幻想入りしてしまったんじゃないかしら」

霊夢の口から能力という単語を聞いた時、その能力に覚えがあるような気がした。

「あの、紫さんと霊夢さんも能力を持っているんですか」

私が質問すると紫が答えた。

「私は境界を操る程度の能力を持っていて、霊夢が空を飛ぶ程度の能力を持っているわよ」

「能力をそういう風に言うのなら、私は妖と魔を操る程度の能力を持っていることになりませぬ」

霊夢はそれを聞いてから、私をじっと見つめて言った。

「あなたも能力を持っていたのね。それも、結構厄介そうな能力ね。紫はこの能力が幻想入りの原因だと思っかしら」

「絶対とは言えないけど、多分その能力が原因だわ」

私もこの二人の話を聞いて、噂が原因ではなく私の能力が原因だと思うようになっていた。私は能力を昔から少しだけ使うことができ、下級魔法や弱い妖術などが使えた。だから、どんな不思議なことが起きてもおかしくは無いと思っていた。だけど、実際に起きてみると普通に混乱してしまった。私は紫に帰ることが出来るのか聞いてみることにした。

「紫さん、ちょっとお聞きしたいのですが、私は無事に外の世界に帰ることが出来るんでしょうか」

私がそう言うと紫と霊夢は少しの間顔を見合わせたままに

なった。しばらくすると紫が口を開いた。

「私と霊夢が力を合わせれば時間は掛かると思うけど、あなたを外の世界に帰してあげることが出来るわ」

「その代わり、しばらくの間は幻想郷に住んでもらうことになるわ。夜宵、これはすごく重要な話よ。紫と私で外の世界と幻想郷を短い間だけ繋ぐことであなただを外の世界に帰せるの。このチャンス逃したら二度とあなたは外の世界に帰れなくかもしれないわよ」

「あなたがどうするかはあなたの勝手よ。でも、霊夢が言った通り、このチャンスを逃したら幻想郷で永遠に暮らすことになるわ。自分の人生なんだからちゃんと考えなさい。私達はここでしばらく待ってあげるから、人生を無駄にしない答えを出しなさいね」

紫と霊夢は言い終えてから黙り始めた。私は、自分が今この瞬間に危機的状況に立たされるとは思ってもみなかった。この選択で人生の大きな選択の一つが決まってしまう。14年間しか生きていない私の人生の終着点が決まるかもしれないこの大きな選択には冷や汗も流れてしまう。私の親は私が小さい時に亡くしてしまっただけで、外の世界に帰らなくてもいいという考えも浮かんだ。それでも、大好きな家族は外の世界に存在するのだから、家族との思い出のある場所に帰るのは当然だと思う。だから、私の答えは決まった。その答えを紫達に伝えた。

「紫さん、霊夢さん、私を死んだ家族との思い出がある大切な私の居場所に帰してください」

私が消え入るような涙声で、しかし覚悟を決めた真っ直ぐな眼差しで私の思いを伝えた。霊夢と紫は私の外の世界の大切な場所への強い気持ちに答えるように言った。

「あなたの気持ち受け取ったわ。必ずあなたを外の世界の大切な思い出のある町に送り届けるわ」

「私と紫に任せなさい。絶対にあなたを帰してみせるわ。大船に乗った気持ちでいなさい」

私は紫と霊夢の力強い言葉で、元気が出て来たのを感じていた。この二人なら大丈夫だと思ってしまうくらいにこの二人には安

心感があった。私は二人に言った。

「どうか、よろしく願います」

二人は私に近寄ってから、包み込むように私を抱いた。その瞬間、私は我慢しきれなくなったのか、多くの涙を流した。私がこんなに泣いたのはいつぶりだろうか、親を亡くした5歳頃から今まで涙を流した記憶が無い。だからなのか、私の涙はしばらく流れ続け、泣き止んだのはそれから1時間後だった。

霧の湖で弾幕

私が泣き止んでから、しばらくして紫は言った。

「私たちが繋ぐ作業をしている間、夜宵をどうするのかちやんと考えているの、霊夢」

「博麗神社だと邪魔になるから紫の家置いておけばいいんじゃないの」

「私の家だと橙の遊び相手にされて、夜宵がボロボロにされるかもしれないから無理ね」

二人の家にも色々事情があるのは承知の上だから、どうするかは自分で決めるつもりだった。

「霊夢さん、紫さん、住む場所は自分で探してみますから、あんまり気にしないでください」

私がそう言うのと紫と霊夢は安心した表情になった。

「あなたがこの短時間で自信に満ちた顔になるなんて、初めはすごく不安そうな顔してたから結構心配だったけど、これなら一人でも大丈夫そうね」

「それなら、幻想郷の簡単な地図を渡すわね。紫が書いたものだから分かりにくいところもあるかも知れないけど頑張つてね」

霊夢の言葉に不満そうな紫を無視して私はお礼を言った。

「ありがとうございます。霊夢さんと紫さんには迷惑ばかりかけてしまって、本当に申し訳ないと思いますよ」

「別に気にしなくていいのよ。それじゃあ、私と霊夢は作業を始めるから、そろそろ行きなさい」

私は力強く言った。

「はい、よろしくお願いします」

私はそれを伝えてから博麗神社をあとにして、勘で能力を使って空を飛び、霧の湖にあると地図に書かれている紅魔館を目指した。その途中で弱そうな妖精が攻撃してきたから私の妖術と魔術で倒してやった。霧の湖に近づいて行くと氷の妖精ぽい子に道を阻まれてしまった。

「あんた、この辺じや見ない顔だけど、弾幕ごつこの相手してくれよ」

私は氷の妖精の言うことの意味が分からず、混乱したまま言った。

「えつと、私は外の世界から来たから、弾幕ごつこがなんなのかわからないんだけど」

私がそう言うと氷の妖精はとても驚いた。

「えつ、それじゃあ、あたいのことも知らないのか」

「うん、だから自己紹介させてもらうね。私は夕闇夜宵だよ」

私がちやんと自己紹介すると氷の妖精もしてくれた。

「あたいはチルノ、見ての通り氷の妖精だよ。それで、弾幕ごつこつて言うのは、スペルカードっていう技を出すための物を使って戦うことなのよ」

チルノの説明で大体のことは分かった。つまり、魔法みたいにアイテムを利用しないと使えない物を使って戦うことだと思う。

「ねえ、チルノちゃん、弾幕ごつこをやってみたいから相手になってくれないかな」

「別にいいよ。でも、あたいは絶対に手加減しないよ」

チルノがそう言った後に私は少し微笑んだ。

「その方がこつちの練習にもなるからそれでいいよ」

私がそう言うとチルノは少しムツとした顔になった。それからすぐに笑顔になって言った。

「それじゃあ、始めるよ。スペルカード発動」

凍符『パーフェクトフリーズ』

チルノがスペルカードを発動すると、カラフルな球体が魔法陣のような物から発射された。その球体がおそらく弾幕なのだろう。私はそれを避けながら間合いを詰めて行つた。その途中で弾幕の色が白っぽくなり一時停止してから不規則な動き方を始めた。

「夜宵、逃げてばかりだとあたいに勝てないよ」

チルノの余裕そうな顔に少しムカついたから、直感を信じて私も戦ってみることにした。私はその場で止まってチルノに言った。

「それなら、そろそろ私もスペルカードを使ってみようかな。
スペルカード発動」

妖符『ミッドナイト・ムーンレイザー』

私もチルノと同じように魔法陣のような物を出して、そこから五本のレーザーと黒い弾幕を放った。五本のレーザーの内的一本がチルノの背後にある魔法陣を破壊した。それによりチルノの弾幕は消えた。

「そんな、あたいの弾幕がやられるなんて」

自分の弾幕が消されたことにうろたえているチルノに言った。

「初めての弾幕ごっこだったけど、意外に簡単だったよ。また、やろうね。スペルカード発動」

魔符『デモンズ・ナイトメア』

チルノに一点集中の弾幕が飛んでいき全弾命中した。

「うわー！ー！」

チルノはやられてゆつくりと地面に落ちて行った。やられたチルノを追って私も降りて行った。落ちたチルノは完全に気絶していたので日陰に寝かせた。それから目的地の紅魔館を目指して再び移動を始めた。

私の目的地の紅魔館は霧の湖の真ん中あたりに建っているらしので行ってみると、そこには紅魔館という名に相応しい赤いお屋敷が建っていた。私は礼儀正しく門から敷地に入ろうと思い、降りてみると門番ぽい妖怪が居たが寝ていた。仕方なく自分で門を開けて入ることにした。そこから少し歩いて、お屋敷の扉を開けて入るとどこからともなく声がした。

「ここは私の屋敷よ。この高貴なる吸血鬼レミリア・スカレットに何かようかしら」

上から声がしたので見上げてみると、そこには自分の翼で飛んでいる見た目が若い吸血鬼がいた。私は能力をだいたい使いこなせるようになって、一定範囲内にいるなら気配を察知できるようになっていた。私の目の前にいるレミリアという吸血鬼以外にもこの屋敷には数人の住人がいるようだ。

「すいませんがこのお屋敷に居候させていただけませんか」

「あら、住む場所が無いのかしら。可哀想なあなたなら部屋を貸してあげるわよ」

レミリアは哀れみの視線を向けながらそう言った。その時、誰かがホールにやって来てこう言った。

「いけませんお嬢様、勝手にそのようなことをされては我々メイド共の仕事が増えて、疲労がより多く溜まってしまいます」

やって来たメイドがそう言うのとレミリアは微笑みながらも不機嫌そうな様子でこう言った。

「あら、紅魔館のメイド長である十六夜咲夜、あなたがこの私に意見するなんて生意気ね」

「お嬢様、考え直して貰えませんか」

レミリアは一瞬私を見てからメイド長の咲夜に言った。

「そこまで言うなら、この私を力尽くで止めてみなさい。まあ、咲夜程度なら簡単にひねり潰してあげるわ」

「すぐに終わらせてみせます」

それを言い終わると二人は戦闘態勢に入った。その直後に大きな音が聞こえてから誰かの声が聞こえてきた。

「お姉様、どこにいるの？早く私を止めないともっと破壊しちゃうよ」

どうやら声の主はレミリアの妹のようだ。レミリアは苦笑いしながら言った。

「あらあら、大変なことになって来たわね」

しばらくすると二階の奥から金髪の吸血鬼が現れて、レミリアに向けて言った。

「あははは、みーつけた」